

乳児保育における模擬保育の試み 2

— 卒業生の課題を手がかりに —

The importance of simulated infant-care in preparing for nursery school teaching:
Research and survey results Part 2.

加 藤 房 江
(こども学科 専任講師)

要旨 「乳児保育における模擬保育の試み 1」¹⁾ では、本学の卒業生が、保育現場において、どのような活動状況であるのか、仕事に対する困難さや課題はどのようなものがあるのかを検討した。その内容をもとに、困難さや課題を感じる保育内容を在学生の模擬保育のテーマとして設定した。在学生が、保育実践をイメージしやすい「乳児保育」の授業として模擬保育を行うことで、子ども理解や保育技術の向上など、保育の専門性を高める教育の効果を探るものである。保育所実習の事後指導的な役割と乳児保育の実践的なまとめとしての模擬保育の有用性において、今後の保育者養成に役立てる若干の知見が得られたので、ここに報告する。

【キーワード：乳児保育 模擬保育 保育実習】

1. はじめに

1. 「乳児保育における模擬保育の試み 1」¹⁾ から分かったこと

卒業生の同窓会の意味合いを持つ、ホームカミングデイが 8 月に開催される。その際に平成 26 年度に卒業した卒業生 64 名、それ以前に卒業した卒業生 16 名の計 80 名に質問紙調査を実施した。調査内容は、「卒業して何年目であるか」「勤務先の調査と配属クラスの担当年齢」「大学時代にもっと学んでおけばよかった内容」「就職までにやっておけばよかった内容」等の 54 項目についてであった。

「卒業して何年目であるか」については、1 年目の卒業した学生が 64 名と多く 80%を占めており、それ以前に卒業した卒業生は 16 名の 20%となっていた。

「勤務先の調査と配属クラスの担当年齢」については、保育所に勤務している卒業生が、42 名の 53%であった。幼稚園に勤務している卒業生は、24 名の 30%であり、認定こども園に勤務している卒業生は、6 名の 8%であった。幼児教育関係に就職していない卒業生は 7 名の 9%であった。卒業生の半数以上が保育所に勤務している実態が分かった。平成 26 年度の 145 名の卒業生の就職先においても、保育所が 74 名の 51%が最も多く、幼稚園が 55 名の 38%，施設・学童保育・小学校

は 10 名の 7%であった。幼児教育関係に就職していない卒業生は 6 名の 4%であった。

配属クラスの担当年齢では、卒業生 1 年目のみでは、54%の半数以上が 3 歳未満児を担当していることが分かった。今回のホームカミングデイにおいて、参加していない学生もあり、保育所勤務が平成 26 年度の就職内定者の幼稚園と保育所の比較においても、51%を占めていることから、3 歳未満児の担当は、もっと多いのではないかと予想された。これは、三好・石橋 (2006)²⁾ の、初任保育者の担当クラスの現状と子どもの遊びに関わるときの保育者の問題意識を調査した研究において、初任保育者の担当する保育では、73%が 0 歳から 3 歳までの乳児を複数の保育者と経験している実態をあげている。この研究よりは、数字は低いものの、初任保育者は、3 歳未満児を担当している割合が高く、勤務年数を重ねると 3 歳未満児から、3 歳以上児を担当していく割合が増える傾向にあることが分かった。

「大学時代にもっと学んでおけばよかった内容」「就職までにやっておけばよかった内容」では、保育者としての困難さや課題を抱えている内容が反映されていた。乳児保育の困難さ・課題についての得点が高かったものに、「各発達段階の乳児理解について」「声がけの仕方」「注意の仕方」「人とのやりとり・トラブルの対応」「けがの処置について」

「アレルギー対応」「トイレトレーニングについて」「発達に合わせた着脱の援助」「行事についての予備知識」「手遊び」「未満児ができる遊び」などが挙げられた。子どもの生活の援助や遊びの関わりの中に「各発達段階の乳児理解について」「声がけの仕方」がすべて、関わっていることを考慮し、それを全体に加える形で、模擬保育のテーマに設定した。また、「未満児ができる遊び」が高得点であり、各年齢に応じた遊びや手遊びに絵本を含めた保育設定の活用も多いことが予想されるので、これらを含め、他の高得点の内容を合わせた課題を9つの模擬保育のテーマに設定した（表1）。

表1 模擬保育のテーマ

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1) 子ども同士のけんか、トラブル 2) トイレトレーニング、おむつ交換 3) 衣服の着脱援助・たたみ方指導 4) 手遊び、絵本 5) アレルギー対応や食事 6) 未満児の遊び、制作 7) 0歳児の遊び 8) 1歳児の遊び 9) 2歳児の遊び |
|---|

2. 授業改善の視点から

「野中（2008）³⁾は、「乳児保育Ⅰ」（1年後期）で基礎を学んだ学生は「乳児保育Ⅱ」にどのような学びを求めているか質問紙調査にて、学習課題を探った。具体的事例をあげる事で授業と実習経験とを結びつけて学べ、イメージしやすいと述べている。

船越（2010）⁴⁾の研究として、保育実習を終了した2年生63名に乳児保育0-3歳までの発達区分に分け保育内容をコード化した質問紙調査を実施し、どの程度乳児とかかわりを持ったか分析を行った。モデル人形や、視覚的教材を通して発達、保育の実践と理論を結びつけることが必要であることが示唆された。演習による実際の保育をイメージしやすい保育内容や指導の充実、工夫が必要であるといえる。

松山（2008）⁵⁾（2010）⁶⁾は、保育専攻学生の養成校における学びと実習現場での学びの融合として、新たな学びを創造する場となりうるカリキュラム開発を目的とした研究を行った。部分指導案

作成から模擬保育を通して、学生の課題を見出す学習を展開している。このカリキュラムからは、大学での学びと学外実習の融合が可能であると述べている。

山田（2009）⁷⁾は、保育実習指導としての模擬保育実践とその有用性において、事前指導の良い点や改善点について自由記述の質問紙調査を実施した。保育実習Ⅱで行う設定保育の事前指導としては非常に有効である。模擬保育を体験することで、設定保育の意味や教材研究の方法、実際の環境構成や援助などを理解でき、自分が行う際の見通しがもてるようになった。また、模擬保育で感じたことを互いに話し合い言語化することで、模擬保育で得た学びを進化させることができたとしている。

中田（後藤）・柳瀬・渡邊（2014）⁸⁾の研究において、保育実習の事前事後指導と本実習の学びの連続性を意識した指導が必要であるとし、模擬保育、ロールプレイの効果として、座学だけでは得られない保育者としての援助や保育内容に関連する気づきの効果が期待されることが示唆された。

「乳児保育」における模擬保育では、三好・石橋（2005）⁹⁾の研究がある。「乳児保育Ⅱ」の手作りおもちゃを利用した模擬保育による学びの内容を明らかにし、実践力を養う授業の内容・方法の改善のための資料を得ることを目的としている。課題はありながらも、今回の模擬授業の試みは、学生達に多くの「気づき」を促し、学習意欲を高めたという点においては十分評価できると考えたと述べている。このように理論や技術と学外で学んだ保育実習などの学びの融合として、模擬授業やロールプレイを取り入れた授業が有効な方法として研究されている。しかし、その内容は、3歳から5歳児の造形表現や音楽表現・言語表現・遊びなどの5領域に関する研究がほとんどである。

模擬保育を取り入れた授業は、理論と実践の融合において、ある程度有効であると考えが、乳児保育においても、模擬保育を取り入れた授業の有用性はあるのか検討したいと考える。

本研究では、卒業生の保育現場で仕事上の困難さ・課題を読み取りとり、それを踏まえた、保育実践がイメージしやすい授業を行うことで、保育者として子ども理解を深め、「乳児保育」における模擬保育授業の教育の効果を探るものである。ま

た、この結果をもとに保育者養成に対する指導のあり方を探るきっかけとしたい。

II. 方法

1. 調査対象 S短期大学、乳児保育履修者2年生156名。
2. 調査時期 平成27年11月～12月。
3. 倫理的配慮 模擬保育後、フィードバックシートを配布して、気づきを記録する。それを基に10分程度でフィードバックが行われた。無記名で回答し、個人の情報は厳守することを口頭でも伝えた。

4. 調査内容 模擬保育のフィードバックシート
 模擬保育の実践時に使用するため、フィードバックシートを作成した。保育者役・乳幼児役・観察者役 のコメント欄を設け、「保育者役がどのような言葉がけを行ったか」「自分だったらどうするか」を記入し、言葉がけを意識するようにした。また、発表者の指導内容が分かるように部分指導案も一緒に添えたA3のフィードバック用紙を配布。保育者役、子ども役、観察者それぞれに「指導案作成は的確であったか」「環境構成・準備・道具等準備されていたか」「手順・進め方」「子ども理解」「声のかけ方」等の自由記述を求めた。また、観察者においては、「良かったところ・参考になったところ」「改善点・自分だったらこうする等」の自由記述を求めた。

5. 模擬保育

1) 模擬保育の計画

授業方法は、学生が模擬保育を行う演習形式として実施。

授業の到達目標

「①保育部分指導案の立案作成を行い、模擬保育を通して、保育の実践力を養う。」

「②多様な保育実践方法を学ぶことで、多面的な気づき、見とりの力、自分の課題を見つける。」

「③保育者として協働することの重要性を知り、協力して模擬保育に取り組むことを実感する。」

保育所実習は既に終了しているが、事後指導的な役割と乳児保育の実践的なまとめとしての模擬保育の有用性について検討を行う。

2) 模擬保育の授業実践

保育計画と指導案作成の復習をかねて、部分指導計画の作成事項・模擬保育を行うにあたっての

時間配分・配慮すべき点などの確認を行った。また、クラスを2つに分け、グループ6人程度の中で、2人は、保育者、他の4・5人は、子ども役になる。その他の学生は観察者となり、必ず1回は保育者役になること。一緒に保育者役担当者2・3人で、模擬保育テーマを相談・選択を行った。

担当する学生は、必ず実施2週間前までに部分実習指導案を提出し、不安や疑問があれば、必ず質問・指導を受け準備を行うこととした。

当日は、フィードバックシートを配布した。1組20分程度の模擬保育後、気づきを記録し、それを基に10分程度でフィードバックを行った。

3) 模擬保育後の評価

授業終了後、「模擬保育で学んだこと・気づき」「グループでの協力について」「模擬保育を行う時期について」の質問紙による回答を求めた。136名の学生から回答を得られた（回収率87%）。

III. 結果および考察

1. 模擬保育の発表に向けての準備

模擬保育は、2～3名の学生で、テーマを選択し、協力しながら、部分指導案の作成や模擬保育の準備・打ち合わせを行うようになっている。そして、必ず保育者役・子ども役・観察者の3つの役割を経験することとしたが、ほぼ全員が経験することができ（1人は都合により保育者役のみ経験できず）前向きに取り組む姿がみられた。

「子ども同士のトラブル」「アレルギー対応や食事」などの内容は、どのように模擬保育をしたらよいのか、準備においても内容を十分把握していなければならない、難しかったようだが、指導案作成や準備や発表まで、テーマによっては、何度もアドバイスを求め、実践に向けた努力の様子が見られた。

2. 模擬保育の実施状況とフィードバックシートを基にした結果と考察

学生の20分の模擬保育の発表の後に記録したフィードバックシートの回収を行なった。筆者は、それをもとに学生同士の評価はどうであったか。良かったところの評価、学生が感じた改善点、言葉がけの内容などを伝えた。同時に、筆者の実際の保育場面に想定した視点からの評価や気づいた点などを速やかに伝えた。

1) 保育者役の視点から

「子ども同士のけんか」「アレルギー対応」など、難しい模擬保育のテーマに、なんとか解決に向けてしっかり準備し、子どもの気持ちをくみ取りながら、対応しようとする保育者役の姿が見られた。また、保育場面において、子どもの援助方法が分かっているにもかかわらず、声がけ、実際の保育をする人数などの違いも考慮して、難しさを感じている記述も見受けられた。「0歳児はしゃべらないので難しい」という記述も多く、その場だけではない、実際には、普段からのコミュニケーションが重要だということも認識しているようである。それと共に、年齢が小さいだけに、安全面の配慮や年齢に合わせた活動をどのように展開してよいのかなど、苦慮していた。

指導案については、その大切さを実感し、保育の流れが頭に入っているからこそ、予期せぬ子どもの行動にも臨機応変に対応できるという認識がもてたようである。思い通りにいかなかった保育も、子どもの姿をよくみる余裕が必要であるという気づきがあった。

模擬保育を体験したことで、保育者役として、難しさを感じ、保育実践により工夫が大切であることに気づけたのではないかと考察する。

2) 子ども役の視点から

保育者役が活動を広げ、楽しみながら成長を促していた内容もあり、子ども役になりきろうと努力し、演じる難しさを感じつつ、楽しみながら、子どもの気持ちに共感している姿があった。

また、トイレトレーニングにおいても、実際に成人用のパンツ型おむつを使用したことで、よりリアリティーがあり、子どもの気持ちに近づけた様子が伺える。気持ちを受けとめてもらえることで、安全で楽しい活動の経験、言葉がけの重要性、保育者役が楽しむこと・共感することの大切さを肌で感じていたようである。また、2歳児の保育においても、演じる難しさや分かり易くルールを伝えることの大切さを感じていた。

保育者役の学生が難しいと感じている一方で、子ども役は援助してもらうことに比較的満足していた。子ども役を経験することで、自分の知識として理解し、実際の保育現場で活かしていこうとする、前向きに捉えた記述が多かった。

3) 観察者役の視点から

観察者から見て、参考にしたいところや保育者

の良い面の気づきにおいて、特に声のトーンや早さ、子どもの様子など、保育者役では気づきにくいところも、じっくり観察していた。子どもの発達に合わせて柔軟に対応する姿や、具体的援助がおおむね出来ていたと評価する記述が多かった。また、環境面の配慮や具体的な準備がされていたところも評価していた。

アレルギー対応は、難しい模擬保育のテーマと思われ、アレルギー対応を経験していない学生も多い状況で、観察者という立場より、学生同士の学びという意味合いが深かったと考察する。

子どもに視覚的に分かりやすい物の準備やジェスチャーなどの有効性、身近な素材で、安全で簡単なおもちゃ作りやゲームのルールなど、参考になると記述していた。また、名前を呼ぶことの効果をあげ、早い段階から名前前で呼べるよう努力することの気づきも出ていた。保育者の役割や位置、声がけ、保育方法など、多面的に客観的に捉える視点が持っていた。

観察者から見て、改善点・自分ならこうするという気づきにおいて、保育者役が、目の前の保育で視野が狭くなっているところを、冷静に観察していた。遊んでいる状態から次の活動へ促すのを子どもが自分から動きたいと思えるよう具体例をあげて、声がけの仕方やアイディアを見つけた視点がかった。

同じ素材を使った活動でも、配慮の多さや活動の広がりによりかなり差が見られ、準備がしっかり出来ていたグループは、子ども役・観察者からも安心した評価の記述がされており、準備や環境の重要性に気づけた内容だった。

また、援助・技術だけに留まらず、子ども同士のコミュニケーション力や解決する力を伸ばしていくなど、発展的な気づきも出来ていた。

総合的に見て、事前準備を丁寧に行っていたグループの模擬保育は、子ども役・観察者ともに参考になる部分が多かったようである。年齢が上がるにつれ、理解できることも増えてきているので、事前の約束ごとや、ルールを分かりやすく伝えることも大切であることに気づけ、どのように声がけしたらよいか、また、保育者同士の連携の大切さなどの気づきが持てたようであった。

保育指導案の立案作成において、テーマの内容により難しさを感じ、繰り返し指導を求めたグルー

プの姿もあったが、期限内で協力して立案・実施は出来ていた。しかし、ねらいに対して事前の検討の甘さや保育実践することの難しさが学べたグループも見受けられた。

5. 模擬保育終了後の質問紙調査結果

1) 模擬保育で学んだこと・気づいたことの自由記述において、学生の記述は、「学んだこと・ためになったこと」「気づき」「その他」「困難さ」の3つに分けられた(表3・表4・表5)。

表3 学んだこと・ためになったことの自由記述	記述数 160 (100%)
① 友達の保育が参考になった	29 (18%)
② 子どもの援助・技術	23 (14%)
③ 声がけの仕方	23 (14%)
④ 意見・アドバイスが参考になった	17 (10%)
⑤ 保育現場で使える実践だった	14 (9%)
⑥ 子ども理解へのつながり	6 (3%)
⑦ 絵本・手遊び	6 (3%)
⑧ 指導案を立てて保育を行う	5 (4%)
⑨ おむつ交換・トイレトレーニング	5 (4%)
⑩ 保育の考え方の引き出しが増えた	4 (3%)
⑪ アレルギー対応	5 (4%)
⑫ 子どもの発達理解	4 (3%)
⑬ 遊びのバリエーション・発展の仕方	3 (2%)
⑭ 指導案の書き方	3 (2%)
⑮ 教員のアドバイス	3 (2%)
⑯ 保育現場での困難な対応の経験	3 (2%)
⑰ 経験してよかった・見通しがもてる	3 (2%)
⑱ ケンカの対応	2 (0.7%)
⑲ 実習で経験できなかった学び	1 (0.1%)
⑳ 保育の振り返りができた	1 (0.1%)

表4 気づき・その他の自由記述	記述数 71 (100%)
① 良い点・改善点が見つかる	17 (24%)
② 環境設定・準備の大切さ	11 (16%)
③ 子ども役：子どもの感じ方・気持ちの気づき	10 (14%)
④ 観察者役：対応の仕方・留意点などの気づき	6 (8%)
⑤ 保育者の役割分担・共通理解の大切さ	5 (7%)
⑥ 自分の保育の発見・気づき	3 (4%)
⑦ 指導案の大切さ	2 (3%)
⑧ 教材研究の大切さ	2 (3%)
⑨ 保育者役：保育者の気持ち	2 (3%)
⑩ 臨機応変に対応する大切さ	2 (3%)
⑪ 役になることで対応の難しさの気づき	2 (3%)
⑫ 役になりきる大切さ	2 (3%)
⑬ 個人差や月齢に合わせた対応の大切さ	1 (1%)
⑭ 保育者も楽しむことが大切	1 (1%)
⑮ 保育の工夫が大切	1 (1%)
⑯ 実践的に学ぶことの大切さ	1 (1%)
⑰ コミュニケーションの大切さ	1 (1%)
⑱ 保育をシュミレーションすることの大切さ	1 (1%)
⑲ 雰囲気大切さ	1 (1%)
⑳ もっと勉強してから保育者になる必要を感じた	1 (1%)

表5 困難さの自由記述

	記述数 29 (100%)
① 声がけの難しさ	11 (38%)
② 保育実践の難しさ	6 (21%)
③ 指導案通りにいかない難しさ	5 (17%)
④ 子ども役の難しさ	3 (10%)
⑤ 先生役の難しさ	2 (7%)
⑥ 友達相手の保育の難しさ	2 (7%)

「学んだこと・ためになったこと」では、友達の多様な保育実践方法を学ぶことで、アイディアのレパートリーが増えたようである。この記述の中から、①④⑤⑥⑨⑩の6つは、自分が保育していく上で、イメージとして参考になった項目である。それを除いた14項目は、具体的な保育技術に関し、「学んだこと・ためになったこと」が多く記述されていた。保育技術の取得において、おおむね充実できた結果が得られたと考察する。

特に、アレルギー対応においては、近年アレルギー体質の子どもが増加傾向にあり、就職して直ぐに対応が迫られ、日々の保育のなかで、重大な事項である。保育所保育指針解説書¹⁰⁾において、食物アレルギーのある子の対応では、専門医や、かかりつけ医師などの指導・指示が必要であり、除去食等が提供される場合には、除去食品の誤食などの事故防止に努め、当該の子どもだけでなく他の子どもや保護者にもその旨を理解してもらうことが必要とあると謳われている。

保育現場において、医師・保護者・保育者同士・栄養士との連携と共通理解が必要になり、忙しい保育中においても正確な対応が求められる。

学生にとっては難しいテーマだったようであるが、実習での観察や経験ができた学生の力があつたからこそ、模擬保育のテーマとして実施できた内容であり、実習で経験できなかった学生にとっても有意義な内容だと感じた。

「気づき」については、「良い点・改善点が見つかる」「環境設定・準備の大切さ」「子ども役としての子どもの感じ方・気持ちの気づき」が高得点であった。また、「自分の保育の発見・気づき」「保育者役としての保育者の気持ち」も挙げられていた。「子ども役になって、指導案を立てたときに気づけないことが分かった」や「子どもってこんな気持ちなんだ」「褒められるとすごく嬉しい」など、

子どもの気持ちに寄り添える記述も目立った。

保育者役としては、「準備物がギリギリだったので、早めに準備しなければと反省した。」という記述があり、保育環境を整え、実践していくことの大変さや難しさに気づけ、環境設定・準備の大切さを改めて実感したようである。

観察者役としては、友達の保育を客観的に見る視点がもて「自分だったらこうする方がより良い保育ができる」「話し方の声のトーンや早さを友達の保育を観察することで、改めて気づいた」など、保育実践の方法を比較的冷静に捉えていた。準備の大切さ、環境設定の大切さにも改めて気づけた様子だった。

保育者役・子ども役・観察者役の3つ立場を経験することで、保育の実践方法や子ども理解など、多面的な気づき・それに対する見とり力、自分の課題を見つけていたと考察する。

「困難さ」においては、声がけの難しさ・保育実践の難しさ・指導案通りにいかない難しさを挙げていた。今回、保育者役・子ども役・観察者役を経験することにより、役になる大変さの記述が多かった。また、実際の保育現場を想定し、言葉を発することの少ない乳児において、保育者側の働きかけが多く必要になることや子どもの発達・個人差に合わせた対応が必要になる点考慮して、難しいと感じたと考察する。

②グループで協力できましたか

この項目では、『出来た』と答えた学生は、128名の94%を占め、模擬保育の準備や立案・当日の役割に応じた演じ手は、協力的に行えたといえる。『やや出来た』の4名に関しては、話し合いが足りなかったなど、コミュニケーション不足を感じていた。

『出来たとはいえない』の4名に関しては、「任せきりにしてしまった」との記述を挙げていた。

グループでの協働的な取り組みは、おおむね出来ており、話し合いが十分なグループはより、皆の協力が引き出せ模擬保育が行えた結果となった(図7に示す)。

③模擬保育を行う時期は、いつが適切だと思いますか。

『保育所実習前期の前』と答えた学生は、「実習で活かせるような経験が出来る」や「予行練習が出来る」と記述している。『保育所実習後期の前』と答えた学生が最も多く、58%であり、「前期実習の経験を踏まえての学習が有効である」という記述が目立った。『保育実習終了後』と答えた学生は、「改めて実習の振り返りができる」との記述が多く、「実習前後は忙しい」と実習前後の忙しさを振り返っている記述もあった。中には、全て行いたい記述もあり、おおむね模擬保育の実践は有効であったようであるが、時期に関しては、考察の余地がある(図8に示す)。

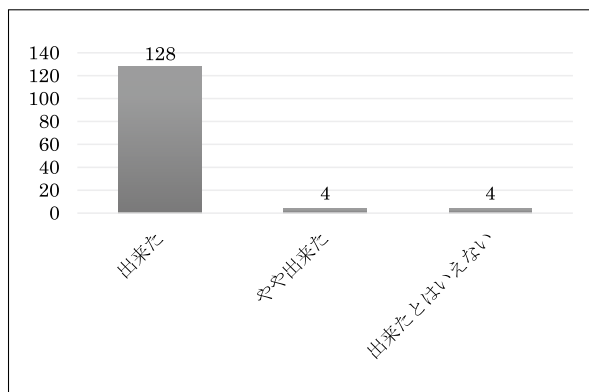


図7 グループで協力できたか n = 136

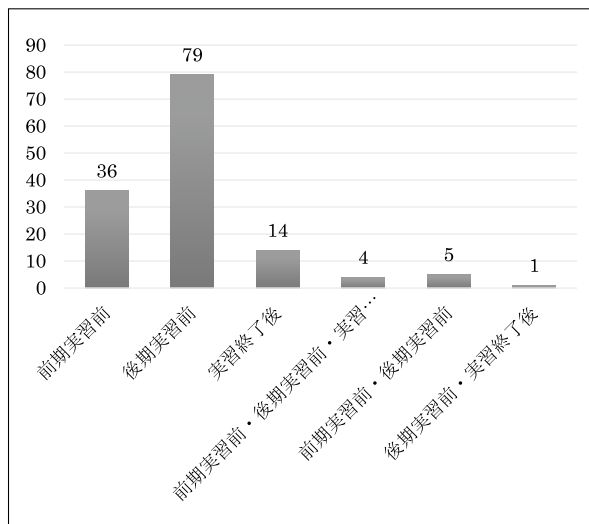


図8 模擬保育を行う時期 n = 136

IV. 結論

今回の研究において、卒業生の保育現場における実態の調査を行い、そこから課題や困難さを洗い出した。得られたデータから、具体的テーマへと絞込み、在学生を対象に行った模擬保育の実践であった。模擬保育の具体的テーマは、苦手な内容もあったが、必要性の高い課題の模擬保育のテーマを実施することで、実際の保育をイメージしやすい内容となった。

模擬保育の実践においては、クラスを2つに分け、並行して模擬保育を実施することで、少人数での学びが実現したというメリットがあった。

フィードバックシートを使って、自分達のグループの模擬保育を学生や教員から直ぐに評価を聴けたことは、保育の改善点に繋がり、保育の幅の広がりや気づきに反映したと思われる。また、就職を控え、より身近なこととして評価や意見を素直に受け入れて、前向きに取り組もうとしていた。

保育技術に関し、具体的項目において、「学んだこと・ためになったこと」の記述が多かった。これは、野中(2008)³⁾の具体的事例を多くあげる事で、実習経験と結びつけて学ぶことが出来イメージしやすいと示唆したことや、船越(2010)⁴⁾の演習による実際の保育をイメージしやすい保育内容や指導の充実や工夫が必要であるという先行研究を実践したものといえるのではないかと考える。

保育部分指導案の立案作成までに、子どもの発達や想定される活動・準備の検討を行い、それを丁寧に活字にしていく大切さが保育実践を左右すること、指導案通りにいかず、臨機応変な対応も必要であることなどを経験したと思われる。このことから、授業の到達目標の1つである「保育部分指導案の立案作成を行い、模擬保育を通して、保育の実践力を養う」は、おおむね達成されたと考える。

今回、1クラス18～20程度の模擬授業が行われ、半分に分かれて体験しても9～10の学生同士の模擬実践を体験することができた。上手くいった保育やその逆の反省点など全てが参考となり、多様な保育実践方法を学ぶ機会となった。また、保育者役・子ども役・観察者役を経験することにより、机上だけでは、気づけない多面的な視点で保育を見る視点や見とる力、自分の課題が持てたことは、2つめの授業目標である「多様な保育実

践方法を学ぶことで、多面的な気づき、見とりの力、自分の課題を見つける」において個人的差はあるが、目標に近づき、十分達成される内容だったと考える。

『グループで協力できましたか』の質問は、クラス運営において、保育者同士の連携は必然であり、協力・協働することの大切さを実感して欲しいと願っての質問であった。模擬保育を行うことに對し、94%ができたと回答したこと、話し合いの大切さ、連携の大切さを学べたとの回答を得た。このことから、3つめの授業目標である「保育者として協働することの重要性を知り、協力して模擬保育に取り組むことを実感する。」は、おおむね達成されたと考える。

また、保育所実習の事後指導的な役割と乳児保育の実践的なまとめとしての模擬保育の有用性について検討では、大学での学びと保育所実習において、実践での対応を学ぶ経験をしたこと。それらを指導案の立案・環境構成・教材研究に結びつけられたこと。そして、振り返りとして模擬保育を経験したことで、多様な学びと気づきがあり、知識の融合ができたと考えられる。このことから、保育所実習の事後指導的な役割と乳児保育の実践的なまとめとしての模擬保育は有効であるということが分かった。

以上から、中田ら（2014）のいう、学びの連続性を意識した指導が必要であり、模擬保育、ロールプレイの効果として、座学だけでは得られない保育者としての援助や保育内容に関連する気づきが得られる効果が期待されるものを「乳児保育」の授業で実践したといえる。

しかし、今回は、卒業生の乳児保育に対する困難さや課題を受けてからの設定時期であり、保育所の前期実習・後期実習が終了してからの模擬保育の実施となったので、振り返りは行ったものの、十分な時間が取れたとはいえなかった。

模擬保育実施時期において、今回は保育所実習終了後の経験の振り返りであり、保育実践の困難さ・課題・経験できなかった保育内容など、保育実践のまとめとしての意味合いが強かった。希望の多かった保育所実習後期前の時期に実施するならば、発達に沿った活動・設定保育・生活の援助など実習の事前学習としての模擬保育内容の検討が必要であろう。

本研究では、学内で学んだ知識を実習で活かし、さらに実習の振り返りとして模擬保育をそれぞれの役を演じることで、多くの気づきをもたらすことに繋がったことが分かった。これは、三好・石橋（2005）⁹⁾の研究である模擬授業の試みは、学生達に多くの「気づき」を促し、学習意欲を高めたという点においては十分評価できると考えると述べており、このように理論や技術と学外で学んだ保育実習などの学びの融合として、模擬授業やロールプレイを取り入れた授業が有効な方法であると述べており、それを実践できたといえる。また、松山（2008）⁵⁾（2010）⁶⁾の、保育専攻学生の養成校における学びと実習現場での学びの融合として、部分指導案作成から模擬保育を通して、学生の課題を見出す学習を展開する中で、大学での学びと学外実習の融合が可能であると述べており、これらの研究を裏付ける内容となった。

この模擬保育を通して、保育現場に就職する前に自分の保育以外に友人の行なった模擬保育に興味を示し、実際の保育現場での活用を視野にいれ、それぞれの課題やそれを改善する糸口がもてた点に意義があるだろう。今回の模擬保育の実施にあたり、S短期大学で学んださまざまな科目や実習や学内外の体験が活かされていると感じ、自らの保育観を考え保育実践を行なっていく上でのステップであると考ええる。

今後は、実施時期を含め、保育専攻学生の保育者として資質向上につながる学びの深化として、大学での知識と実際の保育が融合できる保育内容や充実の工夫について、さらに検討していきたい。

謝辞

アンケートにお答えくださった学生の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 加藤房江. 「乳児保育における模擬保育の試み 1」 埼玉純真短期大学紀要, 2016, 9, (p. 33 - 38).
- 2) 三好年江・石橋由美 『初任保育者の担当ク

ラスと子どもの遊びにかかわるときの問題意識からみた保育士養成校の課題 新見公立短期大学紀要, 2006, 27, (p. 111 – 116).

- 3) 野中千都 「乳児保育Ⅱ」の教授内容に関する一考察～学生によるアンケート調査より～ 西南女学院大学紀要, 2008, 12, (p. 146 – 172).
- 4) 船越利代子 “乳児保育”授業における課題—保育所実習アンケート分析から— 筑波国際短期大学紀要, 2010, 38, (p. 1 – 15).
- 5) 松山由美子 保育者養成における「保育実践力」育成のためのカリキュラムの構成と評価 四天王大学紀要, 2008, 46, (p. 233 – 253).
- 6) 松山由美子 保育者養成における「保育実践力」育成のための学びの場 四天王大学紀要, 2010, 49, (p. 197 – 212).
- 7) 山田秀江 保育実習指導としての模擬保育実践とその有用性（四條畷学園短期大学）全国保育士養成協議会 第48回研究大会, 2009, (p. 2 – 112).
- 8) 中田（後藤）範子・柳瀬 洋美・渡邊 眞理 『共の育つ保育者養成』の探求 2 保育実習Ⅱ（保育所実習）に向けた保育実習指導のあり方 東京家政大学紀要, 2014, 54, (p. 9 – 23).
- 9) 三好年江・石橋由美 授業「乳児保育Ⅱ」の模擬保育から学生が学んだこと 新見公立短期大学紀要, 2005, 26, (p. 151 – 160).
- 10) 厚生労働省. 保育所保育指針解説書 フレーベル館, 2008, (p. 172 – 175).